

Republic of the Union of Myanmar

Photo & Text = Takaji Ochi
Special thanks = edive
Design = PanariDesign



未知の国、 ミャンマーで 潜る

タイのカオラックにあるediveが、
ここ数年毎年開催している
隣国ミャンマークルーズに乗船リポート！

日本人ダイバーにとっては、未知数なところが多いこの国の海には、
いったい何が潜んでいるのだろうか。

タイ国境の町、カウソでミャンマー入国手続きを済ませると、
船首に掲げられた旗は、タイ国旗から、ミャンマー国旗へと変わり、
未知なる海へ踏み出した事を強く印象付けてくれる。

さあ、未知なる海ミャンマーへ出航だ！

2010年10月に
国旗のデザインが
変わったミャンマー。
この国の海中は、体
どんな景観を見せ
てくれるのか。

未知の国、ミャンマーで潜る





01



02



03



04

未知の国、

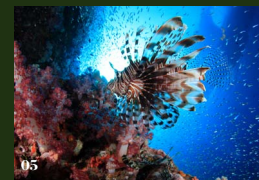
ミャンマーへ

皆さんには、ミャンマーの海中の想像がつくだろうか？ ほとんど情報の無いこの国の海、そんな海にここ数年間、

日本人ダイバーに門戸を開くチャンスを与えてくれているのが、タイのカオラックにある日系ダイブショップ ediveだ。使用するクルーズ船は、以前インド、アンダマン諸島クルーズで乗船したタイのパヌニーヨット。このコンビで、日本人ダイバーへ新たなダイブディスティネーションへの様々なダイブクルーズを提供している。

船はカオラックのタブラム湾を出航して、リチュエローロックでのダイビングを終えると、一路タイ・ミャンマー国境へと北上を続ける。タイでのダイビングはこのリチュエローロックだけで、あとは国境を超えた、未知の海でのダイビングになるわけだ。

やばい国ではないのか、そんな事を内心少し思いながらタイのミャンマー国境の町ラノーンで出国手続きを終えると、国境線となるクラブリー川河口の対岸にあるミャンマー側の国境の町、カウトンへ移動して入国手続きを行なう。



05



タイ国境の町、カウトンの港には、沢山の漁船や小舟が行き交っていた

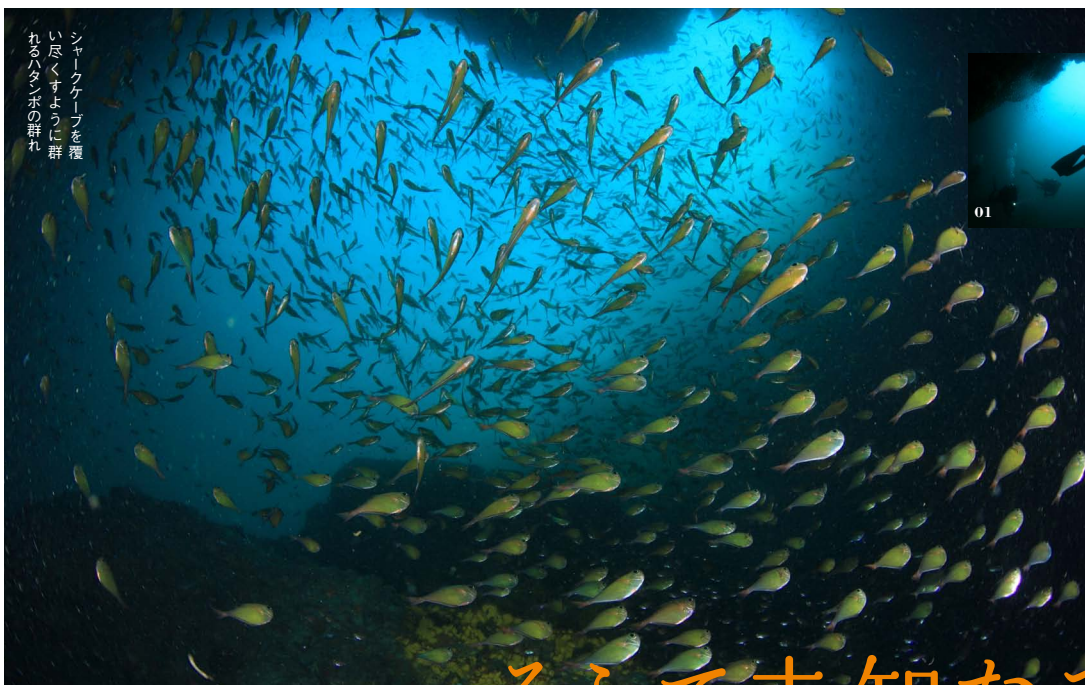
01 カウトンの町の山の頂上にある、仏教寺院
02 ミャンマーに入る前に潜るリチュエローロックの海中景観
03 カウトンの町に日が暮れる。その頃ダイブポイントに向かって移動する
04 リチュエローに群れる、キンセンフエダイの群れ
05 スカンジクダイの群れに囲まれるミノカサコ

未知の国、ミャンマーで潜る



Information Link
http://www.edivekhaolak.com/cru_myanmar.html

関連情報HPへ



シャークケープを覆い尽くすように群れるハタンボの群れ

01



岩には、やたらとカサゴの姿が目立つ。要注意だ

そして未知なる海へ

カウトンの港を後にして、向かう未知の海。気づくと、船首に取り付けられていた、タイ国旗がいつの間にかミャンマー国旗に変わっていた。見覚えの無い人もいるだろうが、このミャンマー国旗、実は2010年10月21日、現軍事政権によって変更されたもの

だ。黄色は国民の団結、緑は平和と豊かな自然環境、赤は勇気と決断力を象徴し、三色の帯にまたがる白星はミャンマーが地理的・民族的に一体化する意義を示している。

船はさらに北を目指した。向うのは、メルギー諸島と呼ばれる、南北約530キロに渡り、約800の島々から構成される群島。今でも、マレー系モーケン族たちが家舟に乗って、昔ながらの生活を続けている地域でもある。

最初に到着したポイントは、シャークケープというポイント。ケープのある岩がちなポイントの周囲は、決して美

しいとは言えない砂地の海底にガレ場が広がっていて、ガンガゼの数がやたら多い。印象としては、スミランよりも、ピビとかの海に似ている。つま

り、地味目。しかし、30mの横穴のケープ内は、流れる時には相当のカレントが発生して、まるでチューブ状態。撮影には不向きだけど、個人的にはこういうのは嫌いじゃない。できれば、撮影抜きに、ケープの中を一気に突き抜けたい気分になった。

シャークケープと名が付いているだけに、穴の中では、3mはあるナースシャークが眠っていることもあるとか。岩礁でかなり目についたのが、カサゴの数の多さ。撮影に夢中になっていると、あっちにも、こっちにも、カサゴが身動きせずにじっとしている。気をつけないと気づいたら、目の前にもカサゴが！なんてことにもなりかねない。



02



03



04

01 シャークケープに向かうダイバー
02 ミャンマーでもマッコスカイグラスを発見
03 巨大なウミウチワが特徴のシーファン・レイスト
04 シャークケープの出口の岩礁は特徴的

未知の国、ミャンマーで潜る





頭上を数匹のモブラが移動していく



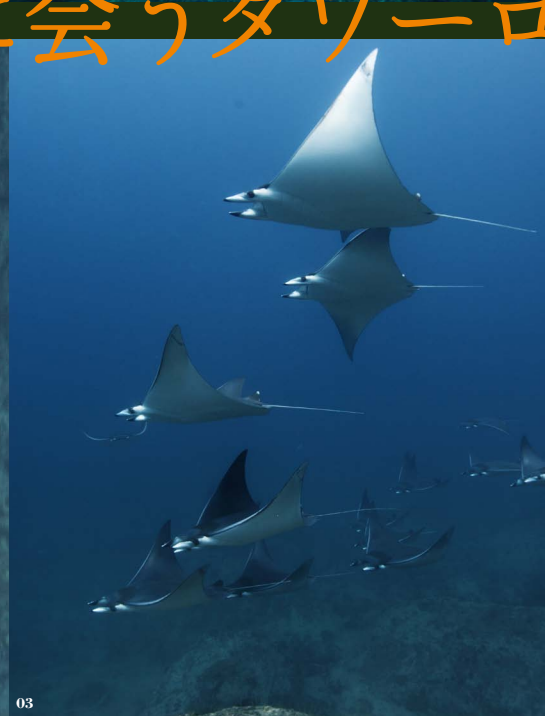
01



02



マンタ同様、真上から接近すると、意外と近寄れる。死角なのだろうか



03

モブラの群れに会うタワーロック

- 01 海底に群れているツノダン
- 02 地味だけど、レアなピンジャロ・スナックバー
- 03 モブラたちは神出鬼没だ
- 04 このポイントがタワーロックと呼ばれる由縁の岩



04

ミャンマークルーズの最大の目的は、クルーズ行程最北端の、タワーロックで、モブラ（ヒメイトマキエイ）の群れ。ここでは、基本的にこれ狙い一本のダイビングになる。通常は透明度が相当に悪いと聞いていたが、自分が参加したクルーズの時には、透明度20m以上はあるくらい抜けていて、どこにモブラたちが泳いでいるかが、一目瞭然だった。多いときには70匹の群れに遭遇したが、案外警戒心が強く、自分もそれが初の遭遇だったので、どのようにアプローチすればいいかがまだわからずに、撮影のチャンスを逃してしまった。

しかし、その後も島の周辺の浅いエリアやその沖にある、巨大な岩礁の点在する根を中心に、10～20匹のモブラの群れに何度も遭遇した。



未知の国、ミャンマーで潜る



Information Link
http://www.edivekhaolak.com/cru_myanmar.html

◀ 関連情報HPへ

海中の花畑を、小魚の雲海が覆いつくす

今回潜ってみた、ミャンマーの海の印象はどちらかと言うと地味目。しかし、それはワイドな視点での事。少し寄りで生き物たちを見てみると、ソフトコーラルのカラフルさや、その上を小魚の群れが雲海のように群れるなど、被写体として十分な程のカラフルさを見せてくれる一面もある。

また、カエルウオやハナダイギンボなどの個体数の多さも目についたし、次のページで紹介するブラックロックでは、レアなスジクロユリハゼの個体数の多さに目を見張った。



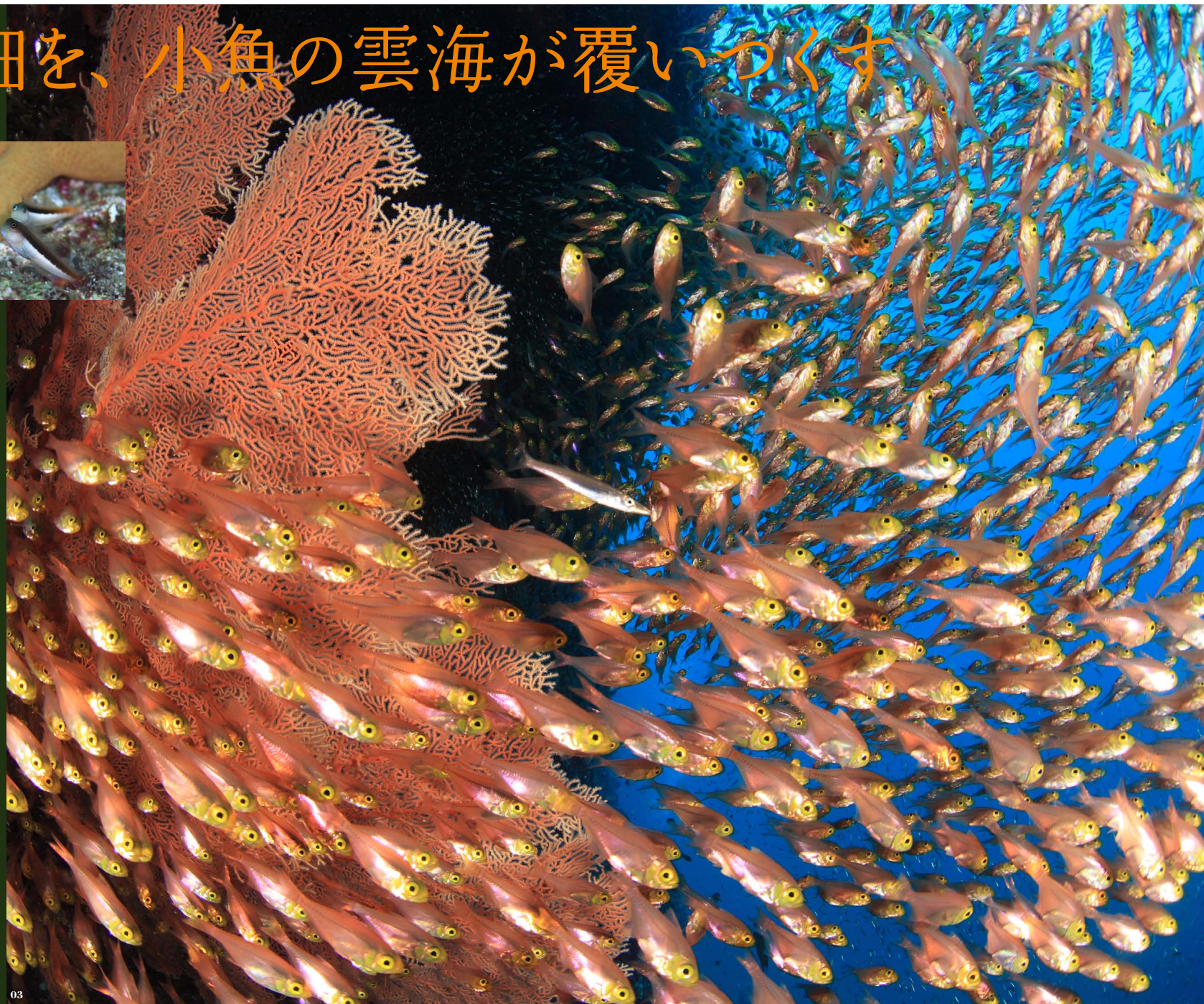
01

01 岩の上には可愛いカエルウオの姿が目立った
02 スジクロユリハゼのコロニーはブラックロックの水深30m付近
03 スカシメジクダイが、ウミウチウを覆い尽くす

02



03



未知の国、ミャンマーで潜る





01



02



03

ブラックロックは、ミャンマークルーズでタワーロックと2枚看板となるポイント。ブラックロックの見所は、何と言ってもマンタ遭遇率の高さだ。メルギー諸島の中でも、他の島から離れて孤立する全長100mの無人の岩礁。この周囲のウォールを潜るダイビングだが、ウォールには雲海のようにスカシテンジクダイやカマスの幼魚などが群れる。水深15m程の岩には、赤く色づいたソフトコーラルが群生し、その上にも同じようにスカシテンジクダイが群れ、時にその上をマンタが通過していった。

クルーズ中でも、マンタ以外の大物遭遇率の高いポイントで、何度かジンベエザメも出現していると聞いた。自分が潜った時には、残念ながらジンベエザメは出なかったものの、数匹の巨大なマンタが、移動したり、頭上で旋回し続けたり、様々なパフォーマンスを見せてくれた。

ウォールから砂地のスロープになる、水深30m付近には、スジクロリハゼの個体数も多く、深場マクロの売りになっている。個人的には、ウォールにいるカエルウオの個体数の多さに驚いた。マンタが頭上や足下を行ったり来たりしていなかったら、もっと集中してこのカエルウオが群れる様子を狙いたかったのだけど、マクロを構える度に、マンタが姿を見せるので、なかなか落ち着いて撮影が出来なかったのは残念だった。

ヒラマサの群れも壮観で、これだけ数が多いと、ダイバーが近寄っても逃げることも無く、悠然と泳ぎ続けて、岩礁の周囲を回遊していた。

クルーズの売りがモブラの群れなので、タワーロックでモブラの出現を待つのでも悪くは無かったが、個人的には、このブラックロックの方が面白かった。



04

マンタのブラックロック



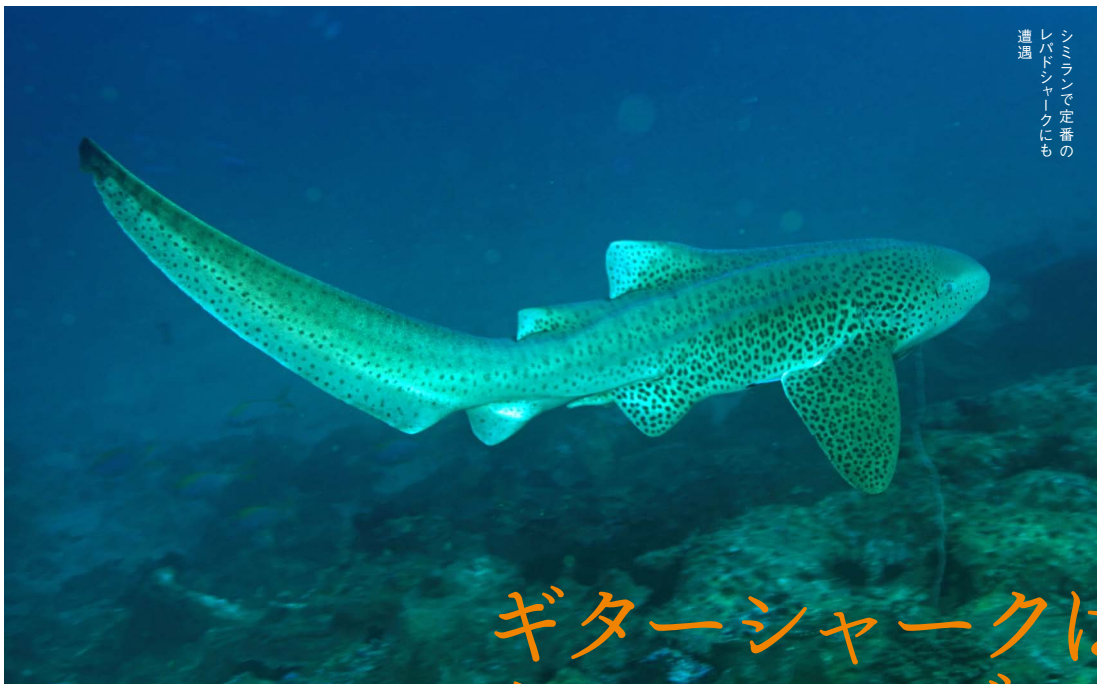
ソフトコーラルの上は、雲海のような小魚たちの群れを覗き尽くされてしまった。

今回は、4〜5匹の巨大マンタが岩礁の周囲を旋回し続けた。

01 今回、浅場にいて、素潜りで撮影し続けたマンタ
02 悠然と泳ぐヒラマサの群れ
03 海中を移動してくるマンタに、ガイドにフォローしてもらって急接近
04 ソフトコーラルのカラフルさが目につく

未知の国、ミャンマーで潜る





シンノメサカタザメ
レパードシャークにも
遭遇

ギターシャークは バレンタインダーに 姿を見せる？



シンノメサカタザメ
の出現に興奮した



06

もう一つ、変わった大物狙いのポイントが、ウエスタンロッキーと呼ばれる石灰岩でできた、岩礁島のポイント。メインの島の中央には、中にイセエビなどが生息する全長30m程の横穴が空いている。

この岩礁にも、赤を基調とした、ソフトコーラルが群生して、スカシテンジクダイなどの小魚が雲海を作っていた。このポイントの目玉は、ギターシャーク（シンノメサカタザメ）。遭遇率は決して高くは無いようだが、定住しているらしい。クルーズ船のオーナー、ジャクリーンは「バレンタインダーに出る事が多いんだ」と何の根拠も無い説明してくれたのだけど、クルーズ中丁度バレンタインダーにこのポイントに潜れるようにスケジュールを調整していたのは、そのジンクスに賭けていたようだった。

撮影のメインの目的も、当然ギターシャーク。しかし、何本か潜ってみたが、見つからない。何度も潜って地形も把握したところで、僕は、他のダイバーたちと離れて単独で搜索してみることにした。

一人、フラフラと他のダイバーが遠目に見えるエリアで潜っていると、目の前からレパードシャークがやってきた。このサメはシミランでも「小ジンベエ」と呼ばれていて、それなりに人気のあるサメなので、追跡して撮影を行なった。そのサメを追跡して、他のダイバーからも完全に離れ、どんどんと深場の流れの急なエリアへと向かうと、レパードシャークが巨大な生き物と交差した。

「あ！ギターシャーク!!」僕はレパードシャークから、ギターシャークへとターゲットを変更して追い続けるとともに、周囲を見渡し、一応タンクをカンカンと鳴らしてみた。

しかし、他にダイバーがいるはずも無く、レパードシャークとの交差で動き始めてしまったギターシャークを撮影するために、ダッシュをしてさらに深みへと移動。止まる気配が無かったので、移動中の写真を数カット撮影したに過ぎなかったものの、結局クルーズ乗船メンバーで、バレンタインダーに目撃できたのは、自分だけだった。自分だけ見れて意気揚々と引き上げるわけには行かず、「なんか、気まずいな……」そう思いながら、船へと引き返した。



01



02



03

01 ウェスタンロッキーの岩肌もソフトコーラルと小魚たちの雲海に取り囲まれていた
02 ケープのあるメインの岩壁へ向かうダイバーたち
03 ホシカイワリも頻りに姿を見せた
04 ケープ内は細く、かなり暗い
05 アフターダイフで夕焼けを見ながらトップデッキでくつろぐ
06 ウミウチワに群れるスカシテンジクダイ



05



04

未知の国、ミャンマーで潜る



Information Link
http://www.edivekhaolak.com/cru_myanmar.html

関連情報HPへ

最後は国境の町に上陸

子供たちの無邪気な笑顔は、いつでも旅の癒し

タイに戻る前には、カントンの町に一時上陸して、市内を観光する。古い東南アジア独特の雰囲気を残した海岸沿いのメインストリートには、人々が溢れかえっていた。裏路地は、スラムのごとく異臭を放つ店舗が軒を並べ、足を踏み込むごとに躊躇した。最近では東南アジア諸国の多くのリゾート地が、開発されて、日本のように、ときにはそれ以上に美しく整ってしまった。否定的な表現をしたのは、その結果、それぞれの国が持つ、独特の生活臭というものを抹殺してしまったと感じる部分に対してだ。

しかし、ここには、過去にタイムスリップしてしまったかのような、人間臭い生活感がいまだに、ムンムンと溢れていた。

港町からトラックタクシーの荷台に乗って、市内を走り抜け、丘の上を指すと、仏教国にふさわしく、クルーズ船の上からも見えていた金色に輝く寺院に到着した。

ここだけが、異彩を放ち、天空から邪気を持った下界の人間たちを見下ろす神々の住む神聖な場所に迷い込んだかのような錯覚を覚えた。観光名所のような仏教寺院と違い、広々とした空間には、我々以外にはほとんど人の姿はなかった。

寺院は、金色やクリスタルに輝き、床は白いタイルが敷き詰められている。白いタイルは雲、その上に輝く黄金郷こそ、人々が来世に求めた理想郷なのだろうか。多くの仏像はどれも穏やかな顔をして微笑んでいた。ただ、今しがた見て来た現実世界の事を考えると、何だかその笑顔が嘘っぽくも見えて来る。穏やかな顔して座っていないで、何かしてあげて下さいと願ひながら、寺院の入り口で購入した花束を供え、手を合わせた。自分の事をお祈りすることを忘れてしまった。



01 寺院からカントンの町を見下ろす
02 港の前の繁華な通りはいつも賑わっていた
03 スクーターに3人乗りするミャンマーの女性たち
04 そして2人乗りのミャンマー兵士
05 ミャンマーの漁船には、時に想像を絶する数の漁師が乗っていた



未知の国、ミャンマーで潜る



Information Link
http://www.edivekaolok.com/cru_myanmar.html

◀ 関連情報HPへ



アフターダイブに夕
日を見ながら皆で
ビールで乾杯！



ミャンマー上陸中、
沖に停泊するバヌ
ニー号

- 01 船上での食事は
そんなに辛い無いタ
イ風で、日本人向け
の味
- 02 クルーズの最後に
皆で集合写真
- 03 クルーズを企画
したカオラックの
ediveの面々
- 04 エントリー前には
しかりとフリーフイ
ンク
- 05 最後は船上バー
ベキュー
- 06 移動前に、次の
ポイントの位置を
チェックする



01



02



03

Information

このミャンマークルーズの行程は上記航路のような感
じになる。潜るルートに関しては、そのときの海の状況に
よって、多少前後する。

使用するのは、豪華快適ダイビングクルーズ船、バヌ
ニーヨット号。6泊7日、16ダイブ。詳しい詳細は、edive
のミャンマークルーズ情報で
http://www.edivekhaolak.com/cru_myanmar.html



04



05



06

未知の国、ミャンマーで潜る